

令和7年度 学校評価結果(前期)

〔学校教育目標〕『進取・敬愛・剛健』の精神を基調とし、「自ら学び・心豊かで・たくましい児童の育成」をめざす

90%以上:A、89.9～80%:B、79.9～70%:C、69.9%以下:D

7月

重点 目標	具体的取組 ※経営計画の重点との関連		担当	評価と観点・評価対象	実現状況の達成度 判断基準	判定基準	備考	達成度	判定	改善策 具体的取組
1 授業力向上と学力の定着	① 町2	(1)－① 教科等の資質・能力の育成に向けた児童主体の授業づくり	学習指導部	【努力指標】 〔教師アンケート〕 ・資質・能力を育成するために ①単元で働かせる数学的な見方を明確にして授業に臨む。 ②カードを活用して、数学的な見方・考え方を働かせる授業を行う。	① A:該当するどの授業でもできた B:8割の授業でできた C:6割の授業でできた D:6割の授業より少ない ② A:該当するどの授業でもできた B:8割の授業でできた C:6割の授業でできた D:6割の授業より少ない	A+B	・できていない職員には、他のクラスの授業を参観する機会を設ける。	教師 ①90.0% ②90.0%	A	・授業では、単元で働かせる数学的な見方を明確にし、それを「ミカタ」という言葉で児童と共有することで、主体的な授業になるよう取り組んできた。現状としては、「ミカタ」が教師にも児童にも定着してきたところである。しかし数学的な見方の捉えがまだ正確ではなく、教師によって理解に差が見られた。そこで、もう一度数学的な見方の捉えを全体研究会で再確認し、全員で同じ単元の教材研究を行った。この時間のおかげで、数学的な見方の捉えが共通理解できた。 ・2学期は、数学的な見方を使って、児童が思考を発展させていくことで、子供主体の授業を行えるように取り組んでいきたい。
	②	(1)－② 学習規律・学び方の確立		【努力指標】 〔教師アンケート〕 ・安心・安全な風土の中で児童主体の授業を行うために、「学習のルール」が身につくように指導する。	「学習のルール」が A:身についている B:ほぼ身についている C:あまり身につしていない D:ほとんど身につしていない	A+B	・できていない場合は、教師アンケートの回数を増やして意識を高める。	教師 100.0%	A	・昨年度からの継続した取組のため、児童も教師も意識が高まってきており、状況に応じて、学習のルールを確認しながら指導を続けている。しかし全児童に身につけているとはまだ言えない。 ・9月の学習目標の取組では、学習のルール①「関係ないことや話をしない」という項目に重点を置き、全校で取り組むことで、安心感のある学級づくりを行っていききたい。
	③	(1)－③ 読書活動の充実		【成果指標】 〔学級担任の調査〕 ・読書賞にむけて、学級の児童は、目標の冊数を達成している。 1・2・3学年→7月:40冊、2月:100冊 4・5・6学年→7月:35冊、2月:85冊	〔学級担任の調査〕 A:9割以上の児童ができています B:8割以上～9割未満の児童 C:7割以上～8割未満の児童 D:7割未満の児童	A+B	・読書賞を設けて、児童の意欲を喚起する。 ・月ごとに冊数を集計し、読書への意識を高める。	教師 70.0%	C	・朝読の時間を利用して、本に親しむ児童は多い。しかし、読書賞を到達できた児童は78%と個人差は大きい。また、本の返却期限を守れない子もみられる。新刊や時節に合わせた本を紹介したり、委員会でイベントを行ったりして、図書館に来たくなる環境づくりを行う。また、毎月の冊数の集計で、読書賞の意識を高められるようにする。
	④ 町3	(1)－④ 小・中の一貫した指導を見据えた、外国語教育の推進		【満足度指標】 〔児童アンケート〕 ・英語で自分のことを伝えたり友達のことをたずねたりして、コミュニケーションをとる力が身についている。	コミュニケーションをとる力が A:身についている B:ほぼ身についている C:あまり身につしていない D:ほとんど身につしていない	A+B	・異学年交流等、コミュニケーションの場を工夫する。	児童 86.7%	B	・単元ごとに出てくる新しい表現については、ALTと繰り返し練習をしたりペアでやり取りをしたりすることで概ね身につけることができています。今後は新しい表現の練習だけでなく、これまでに身につけてきた既習の表現もやり取りの中で使っていくことで、コミュニケーションの引き出しを増やし、より話す力がついたと実感できるようにしていく。

重点 目標	具体的取組 ※経営計画の重点との 関連		担当	評価と観点・評価対象	実現状況の達成度 判断基準	判定基準	備考	達成度	判定	改善策 具体的取組
2 豊かで健やかな心身の育成	⑤	(2)－① 児童理解に基づく個に応じた特別支援教育の充実	生徒指導部	【努力指標】 〔教師アンケート〕 ・個別の支援が必要な児童に対し、保護者や地域支援室等と連携し、共通理解を図りながら全職員で対応している。	A:できている B:ほぼできている C:あまりできていない D:ほとんどできていない	A+B	・支援の方法や役割分担を明確にし、児童理解の会や終礼等で共通理解を図っていく	教師 92.8%	A	・児童理解に基づく個に応じた支援の充実のため、現状の連携体制を全職員で共有していく。また、現状の児童理解の会に加え、個別の支援が必要な児童について、今後もケース会議を実施していく。その際には担任だけでなく、管理職や支援員、必要に応じてスクールカウンセラーや生徒指導サポーターも参加し、具体的な支援内容や課題、役割分担や短期目標などを共有して支援の質の向上を目指していく。 ・保護者との連絡を密にし、家庭での様子や課題を把握することで、学校と家庭が連携した効果的な支援体制を構築していく。
	⑥	(2)－② 自己肯定感・自己有用感を高める人間関係づくりの推進		【満足度指標】 〔児童アンケート〕 ・友達を傷つけることを言ったりしったりせず、やさしい言葉遣いに心がけ、思いやりのある行動をとっている。 【満足度指標】 〔保護者アンケート〕 ・わが子は、友達を傷つける言動をとることがなく、思いやりのある行動をとっている。	A:できている B:ほぼできている C:あまりできていない D:ほとんどできていない	A+B	・普段から「いいねカード」の取組を行い、互いの良さを全校放送等で広めていく。その中で、やさしい言葉遣いや心がけ・思いやりのある行動について紹介する。	児童 93.3% 保護者 78.3%	A B	・「いいねカード」の取組を通して学校全体に思いやりの輪が広がってきている。一方、毎月行っている生活アンケートでの訴えの内容の8割以上が、「冷やかしさからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる」となっており、日頃の友達との関わりの中で、どんな言動をすると相手が嫌な気持ちになるのか理解できていない児童は少なくないことが分かった。また、相手が嫌な気持ちになると分かっている、あおってしまう児童も一定数いる。そこで、2学期にはSCによる、「気持ちのコントロール」をテーマにした心の授業を全クラスで行う。指導して頂いた内容を教室掲示することで、その後の指導にも生かしていく予定である。 ・特別活動の行事後に、係や実行委員でがんばった児童が周りから認められる機会を大切にしていく。その他の児童も「がんばってよかった」と思えるよう、観点をほったふり返りを書かせたり、教師がコメントや声掛けを行ったりすることも継続していく。
	⑦	(2)－③ いじめの未然防止と早期発見、迅速・組織的な取組の確立		【努力指標】 〔教師アンケート〕 ・ソーシャルスキルトレーニングを通して、人間関係の構築に必要なスキルが身につくようにする。	人間関係構築のために必要なスキルが A:身についている B:ほぼ身についている C:あまり身についていない D:ほとんど身についていない	A+B	・参考図書の活用 ・全校集会などの場で、ソーシャルスキルトレーニングの目的や方法を紹介する。	教師 91.6%	A	・1学期はいじめの防止等のための年間計画に基づき、4月と6月に、「あいさつ」と「話の聞き方」のソーシャルスキルトレーニングを行うことができた。動画視聴やロールプレイングを通して、学んだことを実践しようという意欲が見られる児童もいるが、校内全体への広まりはまだ希薄である。そこで、2学期以降は全校一斉にソーシャルスキルトレーニングを行う時間を設定する。その際に、各担任が指導しやすいよう、授業の流れの略案や板書で必要な準備物等も生徒指導部で事前に用意することで、全校一斉に同じ指導ができるようにし、児童の関係の構築に必要なスキルの獲得を目指していく。
	⑧	(2)－④ めざす姿の共有と規範意識、自己指導能力の向上		【努力指標】 〔教師アンケート〕 ・生活目標を通して具体的な姿を児童と共有し、工夫しながら指導している。	A:できている B:ほぼできている C:あまりできていない D:ほとんどできていない	A+B	・児童アンケート及びいじめ調査を実施し、実態を把握する。 ・児童アンケートは、100%以上をめざす。	児童 96.1% 教師 100.0%	A	・いじめの積極的認知に加えて、解消に向けての具体的な働きかけについて共通理解を行ったことで、解消数が増えてきている。今後も、全職員のアンテナを高くして、認知数を減らすことではなく、いじめ見逃しゼロの姿勢を大切にしていきたい。
				【努力指標】 〔教師アンケート〕 ・毎月各クラスの具体的な姿を掲示することで意識の継続を図る。 ・達成度を振り返り、児童への意識化を図る。	A:9割以上の児童が達成している B:8割以上～9割未満の児童 C:7割以上～8割未満の児童 D:7割未満の児童	A+B		教師 100.0%	A	・どのクラスも生活目標を通して具体的な姿を児童と共有し、それらを掲示することで意識の継続を図ることができた。 ・今後は「やり切る」を意識するとともに、児童が主体的に取組を進められるように計画を立てていきたい。また、取組みの成果が分かるよう、評価も見える化し、次の取組みへとつなげていきたい。

重点 目標	具体的取組 ※経営計画の重点との 関連		担当	評価と観点・評価対象	実現状況の達成度 判断基準	判定基準	備考	達成度	判定	改善策 具体的取組
2 豊 か で 育 健 や か な 心 身 の	⑨	(2)－⑤ 児童の主体性・ 表現力を高める 活動、児童発信 型の取組の推進	特 別 活 動 部	【努力指標】 〔教師アンケート〕 ・ふれあいグループ活動において、児童が めあてを意識して活動できるように指導して いる。	A:できている B:ほぼできている C:あまりできていない D:ほとんどできていない	A+B	・担任が学級で事 前指導を行うことが できるよう、職員会 議や終礼で周知す る。	教師 100.0%	A	・児童が学年のめあてを意識して活動に取り組めるよう、職 員会議や終礼を通して担任に事前指導を周知することで、 教員児童ともにめあてを意識して活動することができた。児 童は、その学年としての役割を果たし、グループでまとまっ て遊びやふれあい遠足に取り組むことができていた。 ・後期は、次の学年への準備期間として、児童が今の学年 のめあてだけでなく、1つ上の学年のめあても意識できるよ う、教員からの声掛けや事前指導の仕方について工夫して いきたい。
	⑩	(2)－⑥ 体力の向上・健 康の保持増進	健 康 安 全 指 導 部	【成果指標】 〔児童アンケート〕 ・体を動かして勉強したり遊んだりすること が楽しいと感じている。	A:あてはまる B:だいたいあてはまる C:あまりあてはまらない D:あてはまらない	A+B	・児童会体育委員 会によるイベント 等、児童が楽しく参 加できる企画を 行っていく。	児童 95.0%	A	・委員会の取組等で運動を楽しめるような活動を行うことが できた。7月、9月は暑さのため、教室等の涼しい室内で過 ごすことが多かった。今後は安心・安全に体育館と運動場 で体を動かせるように働きかけていきたい。
3 家 庭 ・ 地 域 と 共 に あ る 学 校	⑪	(3)－① 関係機関と連携 した、信頼される 安全・安心な学 校づくりと危機管 理体制の確立	健 康 安 全 指 導 部	【努力指標】 〔教師アンケート〕 ・災害等での危機管理について児童に適 切に指導し、訓練時には学校としての共通 行動が取れている。	A:できている B:ほぼできている C:あまりできていない D:ほとんどできていない	A+B	・各学級で行う指導 について、全校も れなく行うために、 内容と実施期間を そろえる	教師 100.0%	A	・避難訓練では火事や地震を想定して行い、具体的なボイ ントを取り入れ、事前指導を含めて児童も職員も「真剣」に 取り組むように呼びかけて実施することができた。訓練時の 様子や教職員の振り返りを、今後の訓練や指導に生かして いく。
	⑫	(3)－② 生活習慣定着に 向けた家庭との 連携強化	生 徒 指 導 部	【成果指標】 〔保護者アンケート〕 ①わが子は、基本的生活習慣(早寝・早起 き・朝ごはん)が身に付いている。 ②家庭では、ゲームやテレビなどの使い 方のルールを作り、守るようにしている。	A:できている B:ほぼできている C:あまりできていない D:ほとんどできていない	A+B 2つの項目で総合的 に判定する	・年4回メディアに 関する取組を実施 する。	保護者 ①87.4% ②70.0%	B C	・昨年度の同じ時期よりも保護者の肯定的な評価が基本的 な生活習慣は1. 4ポイント、ゲームやテレビの使い方は3. 3ポイント上がった。ゲームやテレビの使い方は一昨年度か ら比べると、8. 4ポイント上がっており、家庭でのメディアの ルール作りが少しずつ広がってきていると言える。しかし、メ ディアと子ども達との関わりは密であり、今後も継続した取 組が必要である。10月の生活目標「あがたっ子のきまりを 身に付けよう」と関連させて、メディアのルールを自ら考えて いく取組を行っていく。
	⑬	(3)－③ 学習習慣の定着 に向けた家庭と の連携強化	学 習 指 導 部	【成果指標】 〔児童アンケート〕 ・宿題を含めて家庭学習を一日あたり、学 年×10分程度している。 〔保護者アンケート〕 ・わが子は、宿題を含めて家庭学習を一日 あたり、学年×10分程度している。	A:できている B:ほぼできている C:あまりできていない D:ほとんどできていない	A+B 児童アンケート・保 護者アンケートの二 者評価で総合的に 判定する。	・家庭学習チェック 表で、時間等を把 握する。 ・テトルを活用し、 家庭学習の取り組 み方のアンケートを とったり、よい取組 を広めたりしてい く。	児童 88.6% 保護者 71.3%	B C	・昨年度から引き続き、家庭学習とメディアの取組を合わせ て行うことで、より効果的により良い家庭学習習慣が身に付 くようにしてきた。今年度も学期に1回取り組む予定である。 ・1学期は5月にチェック週間を設定し取り組んだ。すべて の項目を達成しようと前向きに取り組む児童がほとんどで あった。しかし、普段から家庭学習に取り組むことが難しい 児童は、今回のチェック週間でも家庭学習に取り組めず、 保護者の協力も得られなかった。そのような児童やその保 護者への支援が課題である。
	⑭	(3)－④ 地域の人材を活用 した開かれた 学校づくり		【成果指標】 地域の自然や伝統文化、福祉関係の体験 活動やゲストティーチャーを効果的に取り 入れている。	A:できている B:ほぼできている C:あまりできていない D:ほとんどできていない	A+B	・教育課程に明記 し、地域との連携を 継続していく。	教師 83.4%	B	・生活科や総合的な学習を中心に、ゲストティーチャーを招 聘し授業を行っている。教育課程に位置付けているものが ほとんどで、適切な時期に適切な人材にお願いする環境が 整っているため、しっかり活用していきたい。

重点 目標	具体的取組 ※経営計画の重点との 関連		担当	評価と観点・評価対象	実現状況の達成度 判断基準	判定基準	備考	達成度	判定	改善策 具体的取組
4 組織的な学校運営	⑮	(4)－① PDCAサイクル を活かした校務 部会運営と常に 改善していく学校 経営	運営 委員 会	【努力指標】 〔教師アンケート〕 ・校内における課題や改善点を協議し、そ の改善策や検証方法を明確にした提案を 行うようにしている。	A:できている B:ほぼできている C:あまりできていない D:ほとんどできていない	・A+B	・校務部会やブロッ ク会で、PDCAサイ クルに基づいた記 録用紙を用いるこ とで、もれなくPDCA が回るようにしてい く。	教師 100.0%	A	・PDCAサイクルに基づいた記録用紙を用いることで、各部 会やブロック会で課題を見落とすことなく、計画的に取り組 むことができた。 ・今後も記録用紙を活用しながら、課題の対応策について より深く協議し、全員で共有していくようにする。
	⑯ 町1	(4)－② 教職員の働き方 改革のための効 率的・効率的な 業務改善		【成果指標】 〔教師アンケート〕 ・時間外勤務時間が月平均45時間以内、 あるいは、昨年度より時間外勤務時間が削 減できている。	A:できている B:ほぼできている C:あまりできていない D:ほとんどできていない	・A+B	・できていない職員 には、ICTの活用 や意識化を図り、 原因となっていると 思われる業務の効 率化を図る。	教師 64.3%	D	・1か月の時間外勤務時間の平均時間は、昨年度の同じ時 期に比べると減っており、数値上良い傾向が見られた。しか し、評価は昨年度より下がっており、職員は時間外勤務時 間が減少していると感じていないことが分かった。このことか ら、業務負担を非常に感じていると読み取ることができる。 ・今後、業務の精選や生成AIの活用等で、負担感の減少を 目指す。
	⑰	(4)－③ 教職員全員での 児童理解や情報 共有の確立		【成果指標】 〔教師アンケート〕 ・児童理解の会や終礼等を利用して、児童 の情報が全職員で共有されている。	A:できている B:ほぼできている C:あまりできていない D:ほとんどできていない	・A+B	・児童理解の会を 職員会議と同じ日 に設定する ・週2回の終礼を利 用し、タイムリーな 情報共有と臨機応 変な対応を行って いく。	教師 100.0%	A	・職員会議に長い時間を要する時は、別日でしっかり時間 が確保できる時に児童理解の会を設定し、確実に行うこと ができた。 ・終礼を利用して、児童の情報や対応策を全員で共通理解 することができた。 ・今後も、しっかり児童理解の会を確保し、全員で方向性を 確認しながら児童の対応にあたる。
	⑱	(4)－④ 教職員の協働的 学びの体制		【成果指標】 〔教師アンケート〕 ・校内研修やブロック会で学び合う体制が できている。	A:できている B:ほぼできている C:あまりできていない D:ほとんどできていない	・A+B	・ブロック会を毎月 第一火曜日に設定 し、確実に行ってい く。	教師 100.0%	A	・昨年度より月初めに設定してきたブロック会が定着し、学 習面や生徒指導面等多岐に渡って詳細な点まで協議する ことができている。 ・校内研修会も、ICTや生徒指導等、様々な研修会を定期 的に行うことができた。 ・今後も校内研修・ブロック会の時間を確保し、職員が互い に学び合う体制を整えていく。
	⑲ 町4	(4)－⑤ GIGAスクール 構想実現に向け た取組や校内研 修の推進	G I G学 習 推 進 部 ・ ダ ー	【努力指標】 〔教師アンケート〕 ・抵抗感を感じることなく生成AIを活用でき ている。 〔児童アンケート〕 ・分からないことがあったときタブレットを 使って友達やインターネットの考えを見て、 自分の考えをもったり、新しい考え方をし たりできた。	A:感じない B:ほぼ感じない C:少し感じる D:感じる A:できている B:ほぼできている C:あまりできていない D:ほとんどできていない	A+B	・抵抗感が大きい 職員には、どのよ うなことが抵抗感に つながっているの かを検証し、GIGA 校内研修に取り入 れていく。	教師 78.6%	C	・年度当初、職員の中で抵抗感を感じている人が80%近く だったことを考えると大きな進歩であった。ICT活用の障壁 を取り除き、実践例をもとに実際に活用しながら学べたこ とが成果につながったと考えられる。今後も同様の形式で OJTを行い、効率的・効果的な生成AIの利用を促進してい きたい。